

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

他県の高体連登山部の活動

インターハイに行くと、様々な刺激を受けることができる。日頃は、自県かせいぜい同じブロックのことしかわからないのだが、そういう井の中の蛙にとって、インハイは貴重な情報収集の場である。専門委員長会議に出ると、いくつかの県からは各県独自で発行している登山部報や報告書をいただくことができるのだが、それを読むとお国柄が現れていたり、県によりいろいろと課題が違っていたり、参考になるようなことが書かれている。今回は、そんな中から、興味をもって読んだ記事のいくつかを紹介したい。

静岡県：静岡県高体連登山専門部では、顧問の活動として、10年おきに大きな海外登山、間の5年には比較的小規模な記念登山を行ってきた歴史がある。近年では80年ネパールヒマラヤトレッキング、85年インドヒマラヤ、カングラチャ峰、90年天山山脈、ハンテングリ、ムラモルナヤステナ、01年モンブラン、マッターホルンへと10年ないし5年に一回遠征を行っている。迎えた05年、静岡高体連登山専門部創立50周年記念行事としては、単年度ではなく2005年から2010年まで足かけ6年、のべ10回にわたって「積雪期南アルプス3000峰全山登頂」(甲斐駒も含む)を計画し、無事やり遂げたそうである。また、55周年にあたる2011年にはキリマンジャロ登山を企画し、顧問OBも含む11名全員で登頂した。二つの記録をまとめた報告書を読ませていただいたが、価値ある記録であると思った。

群馬県：登山専門部として顧問の講習会を年3回実施している。内容は1. 夏山顧問講習会(6月：1泊2日で縦走や雪渓技術)、2. 秋山顧問講習会(10月：1泊2日で縦走やクライミング技術、沢登り)、3. 冬山顧問講習会(2月：2泊3日で積雪期の登山技術や生活技術、3月のリーダー冬季講習会のコース踏査を兼ねる)というもの。また、生徒の講習会として、1. 座学講習会(4月：1泊2日で、救急法、気象、読図など登山の基礎知識、総体会場の山域についての基礎知識の学習と習得を目的)、2. リーダー養成研修(11月：1泊2日で、一般登山基礎講習として座学と登山)、3. リーダー冬季講習(3月：3泊4日で雪上技術、雪上生活)の3回研修や講習が行われている。顧問も生徒も系統的に育て、育てていることが素晴らしい。また、県大会、新人大会のほか、2月にはクライミング選手権大会も行われており、16校から64名が参加(2011年度)しているとの記事も驚きだった。

兵庫県：20校の活動報告が掲載されているが、夏合宿ではほとんどの高校が北アルプス(とりわけ穂高、槍が多い)を訪れており、どこも3泊はざら、中には5泊と長野県の学校よりも遥かに活発な活動をしているのではないかという印象を受けた。中には、次のような学校もあった。「宿泊を伴う活動は他校と合同で行うこと。その際には複数の顧問がいること。今年度条件付きではあるが、同好会として認めてもらった。但し、毎年継続には職員会議の合意が必要…。また最低2年間はクラブへの昇格はない。また本校ではどの運動部・文化部ともに泊付きの大会以外の活動は年内3回まで、合計6泊までしか認められない。しかし、1年生が10名入部!!ほ

とんどの職員が反対で四面楚歌の状態の中ではあるが、何とか活動を継続してきた。何とか来年度も維持し、がんばりたいと思っている。」(筆者注やはり顧問ですね)三重県：総体のほかに、春季大会(4月：1泊2日、紀北町天狗倉山)、秋季大会(10月：リーダーの養成、安全登山を志す岳人の養成がねらい)、冬季大会(12月、3泊4日、木曾御嶽、冬山登山技術の基礎を体得し、冬山の楽しさと厳しさを知ることがねらい)、春山合同登山(3月：1泊2日、岐阜県野伏ヶ岳、1泊2日で岳連の援助も受けながら実施)を実施。

これらの活動報告を見たとき、我が長野の実態はどうだろうかと自問せざるを得なかった。かわらばんで僕が常々述べてきたことは、高校山岳部の活動を生かすも殺すも顧問次第ということだが、我が長野もこれらの諸県の実践に大いに学ぶことができるのではないだろうかと思った次第。来週は、山岳総合センターの高校生クライミング研修会があるが、そこに参加する高校はどのくらいあるか？春の針ノ木の高校生のための雪上研修は、もう何年も毎年毎年顔ぶれがほぼ決まっている。これらの研修会については、顧問がクライミングや雪上でのロープを使う技術は自分には敷居が高いと自己規制し、生徒の可能性を摘んでしまっていないか？北アルプスのお膝元という立地条件にある山岳県である長野で一体いくつの山岳部が活発に活動しているか！山好きな我々にできること、それはさまざまな機会を捉え、連続と続いてきた高校山岳部という文化を伝え、少しでも多くの生徒たちにこの素晴らしき世界を伝えること。そのために、近くにあるフィールドを使わないのではなんとももったいない。もっと山へ行きましょう！

松本県ヶ丘高校(県陵)の夏合宿(松田大氏 寄稿) その1

高校山岳部の活動の華は、夏山縦走合宿だと考える。社会人や大学生と違い、高校の山岳部では春山や秋山まして冬山の長期合宿は組めない。そんな意味でも、以前の高校山岳部は独創的な夏山縦走を実施していた。小生自身全国総体の絡みがあり、大町高校時代の2006年の榎海新道の縦走合宿以来夏山縦走から遠ざかっていた。高校生に夏山縦走の文化を伝えるべく、県陵山岳部としては7年ぶりとなる夏山縦走を裏銀座コース3泊4日で計画した。しかしながら高校山岳部顧問最後の夏山縦走はかなりほろ苦いものであった。

大分での全国大会中、残存部隊の夏山合宿を他の2名の顧問にお願いしたが、諸々の事情で実現不可能とわかった。そこで小生の都合が付く盆明けでの合宿を計画させたところ、長期縦走の経験の無い生徒は、3泊以上の山行のイメージがつかめていなかった。最低このくらいとの思いから裏銀座コースとした。夏休み中に十分コースなどの研究をするようにと申しつけてから、全国大会へ出発したのだが、結果的にはろくなミーティングもしなかった様子で、ほぼ白紙状態で出かける羽目になった。

17日の朝大町駅に集合したメンバーは計画書より減って7名プラス顧問2名の計9名(他2年生女子1名が父親と一緒に先行して烏帽子小屋で合流とのことであった)。参加生徒8名中、1年生は1名のみ、また女子が2名含まれていた。ザックも夏山3泊4日には異常に大きく感じる。そのうち一つのザックを持ってみたら優に30kgを超えそうであるので誰のかと尋ねたところ、2年のT君が手を上げた。何でこんなにとの問いに「水を10L持ってます」との弁で、飲むのだとの返事。いくら山行回数が少ないとはいえ開いた口がふさがらず、さすがの小生も適当なアドバイスを与えられなかった。